第52回　VICアカデミー

～弊社理念にある「学習と成長」の実践の一つとして開催しています～

「舞台づくりの裏側～脚本家・演出家の仕事～ 」
講演者：あやめ十八番　代表　脚本家・演出家　堀越 涼　氏
実施日：2025年10月22日（水）

堀越 涼（ほりこし　りょう）



2006年　青山学院大学卒業後、ネオかぶき集団・花組芝居に入座。座内では女形専門として、外部では男優として活動。
2012年　自身が作・演出を務めるあやめ十八番を旗揚げ。
2015年　日本劇作家協会に所属。
2021年　昭和音楽大学ミュージカルコース　演技メソッド講師に就任。
2025年　松尾スズキ氏が校長を務める、コクーンアクターズスタジオ常任講師に就任。

■生い立ちと、演劇との出会い

千葉県香取市にある、香取神宮参道の団子屋に、末っ子長男として生まれる。のちに演劇に携わるようになるとは思いもよらないような、おとなしい性格だった。

中学２年生の時、３年生を送る会でお芝居をすることになったのだが、自分の中で魔が差したのか、なぜか俳優を希望してしまい、初めて舞台に立ったところ、これは面白いと思ったことがきっかけで、高校では演劇部に入部。

高校演劇部の顧問の先生が、国語の授業で森鴎外の『高瀬舟』を朗読してくれたことが印象的で、先生の朗読によって、生徒たちの創造力が掻き立てられるような経験から、演劇のすごさを感じ、高校演劇の世界に深くはまりこんでいった。

■劇団への入団

大学生になってからも、演劇活動を続けており、在学中に、ネオかぶき集団“花組芝居”に入団した。花組芝居は歌舞伎をオマージュする演劇を上演しており、過去に、天気予報士の木原実氏や、名バイプレーヤーとして有名な篠井英介氏が所属していた劇団。この劇団で、女形（女性役を演じる男性）の俳優として、15年ほど活動した。

俳優として生きていくには何か特色が必要だが、自分は線が細かったし声も高かったので、男性役に必要とされるパワーや声量では他の男性俳優に敵わないと考え、生きていくための技術として女形を勉強しようと考えた。

■脚本家・演出家への転身と、自分の団体の立ち上げ

俳優として活動し続けて28歳になった時、義兄を火事で亡くすという不幸があった。自分にとって近しい存在だった義兄を突然の事故で亡くし、悲しみを抱えきれず、今感じている感情を何らかの形に昇華したいと思い、初めて脚本を書き、上演した。これが、脚本家・演出家への転身の第一作目となった。これを上演する際、自分の団体として、“あやめ十八番”という劇団名をつけた。劇団名の由来は、自分の出身である千葉県香取市の花であるあやめと、歌舞伎十八番（江戸時代に、歌舞伎の市川宗家が得意な演目として選定した、18個の歌舞伎演目。おはこという言葉の由来）から取った。

あやめ十八番では、歌舞伎・能・落語などの日本の古典芸能を基礎とし、古典芸能と現代劇の良い所をミックスした、和モダンな演劇を創作している。また、歌舞伎の下座音楽や落語の囃子に影響を受け、劇中音楽は、ＢＧＭから効果音に至るまで、全て生演奏であることも特徴。

第52回　VICアカデミー

■演劇の種類

・ミュージカル：劇団四季・宝塚・東宝など。演劇の中に、歌とダンスが多用される。
・古典芸能：歌舞伎・能・狂言・人形浄瑠璃・落語など、日本に古くからある舞台芸能。
・新劇：俳優座・青年座・文学座など。明治に生まれた、写実的でリアリズムを追求した現代劇。
・2.5次元：平成以降に興隆している、アニメ・ゲーム・小説など、すでにあるコンテンツを舞台化したもの。
・小劇場：およそ10席程度～300席未満の劇場で上演される、すべての演劇。

かつて、上記の演劇はそれぞれの分野でのみ活動していたが、近年は、垣根を超えた創作活動が盛んになってきている。例えば、昭和以前、歌舞伎役者が、歌舞伎以外の舞台・ドラマ・映画に出ることは禁忌とされていたが、近年では、スーパー歌舞伎など、漫画やアニメを歌舞伎化したもの、つまり、歌舞伎と2.5次元のコラボレーションなども叶うようになってきた。

■小劇場演劇の魅力

誰かが演劇を上演したいと考え、劇団を立ち上げて演劇を始めると、まず小劇場演劇に分類される。

小劇場界出身の脚本家、演出家、俳優で代表的な方を挙げると、宮藤官九郎さん（劇団大人計画）、阿部サダヲさん（劇団大人計画）、三宅裕司さん（スーパーエキセントリックシアター）、古田新太さん（劇団☆新感線）、堺雅人さん（東京オレンジ）、八嶋智人さん（カムカムミニキーナ）、渡辺えりさん（劇団三○○）等。

500席以上の大劇場の演劇は総じて、チケット代が1万円以上かかるが、80点～100点のクオリティのものを見ることができる。しかし、小劇場には、下は5点程度から、上は150点以上のクオリティの作品が存在している。

大劇場よりむしろ小劇場を好んで観に行く観客というのは、この150点以上の大当たりを見つけることを楽しみに、劇場に通っている。また、若手の劇団は、最初は必ず小劇場からスタートするので、今後有名になっていく俳優や芸術家の原石を見つけられる。

さらに、小劇場は観客と俳優との距離が非常に近いので、俳優の演技や熱量を間近に感じられるため、大劇場で観劇するよりも迫力があるということも魅力の一つ。

■脚本家・演出家の仕事

脚本家：オリジナルの脚本を書くことと、漫画や小説などの原作があり、それを脚色・潤色するという二種類の仕事がある。
原作がある作品は、ある程度面白いことが保証されているが、オリジナルを０から書き上げることは、困難を要する。
そのため、近年はドラマや大きな舞台では、原作ありの脚本がほとんど。
代表的なのは、松尾スズキさん（劇団大人計画）、三谷幸喜さん（東京サンシャインボーイズ）など。

演出家：最も不必要かもしれないけれど、もっとも作品に与える影響が大きい仕事。
例えば、カンパニーの全員が全く同じ感性を持っていて、同じ方向を向いていれば必要の無い仕事。しかし現実にそういうことはあり得ないので、誰かがリーダー＝演出家となって、その人の感性で作品をまとめあげていく必要がある。具体的には、芸術面の全てを確認し、判断する仕事。舞台美術・衣装・照明・音響などそれぞれの専門家が提案してきたものに対し、芸術的な目線で確認し、方向性を判断・指示し、同様に俳優の動き・演技を確認するのが演出家。
但し、芸術面以外の部分（資金面、広報、券売、事務）については判断しない。それを判断するのはプロデューサーの仕事。
代表的なのは、蜷川幸雄さん、宮本亜門さんなど。

■舞台づくりの流れ

企画　→　劇場申請（本番20か月前～遅くとも12か月前）　→　スタッフ決定
→　キャスト決定（オファー・オーディションなど）　→　宣伝・チケット販売開始　→　稽古　→　本番

脚本家は、劇場申請時にあらすじを作るが、稽古が開始する前に脚本が書きあがっていることは、実際には多くない。遅い人だと、本番の数日前に書きあがるということもある。

演出家は企画段階から関わり、スタッフやキャストの決定にも権限を持っていることが多く、全稽古に参加する。

■脚本家・演出家の仕事の本質

舞台づくりの流れにもある通り、作品の稽古が始まる前にチケットは販売される。つまり、観客は、面白いのかどうかわかる前に、「きっと面白い作品が見られるはず」と信じ、チケットを購入する。そんな観客の信用に応えるのが、脚本家・演出家の仕事だと考えている。何が見られるかわからずに劇場に来た観客が、面白い作品を見て感動する姿を見るために、面白い作品を作り続けていくことを目指している。